

2022 年度漢文夏期集中コース報告

大 竹 弘 子

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでは、40 週間の年間コースとは独立して漢文夏期集中コース（以下漢文コース）を設置しており、2022 年 6 月 24 日（金）より 8 月 3 日（水）まで実施した。

漢文は年間コースでも、プログラム後期において「選択 C」として週 1 回の授業を実施している。しかし、年間プログラムには参加できないが、研究上、漢文読解を必要としている大学院生、研究者等が想定されることから、日本人が書いた漢文を中心に、漢文の基本構造習得・読解に集中したコースを設けている。

昨年度に引き続き Zoom によるオンライン授業となり、昨年度の経験も参考にし、期間・授業構成・授業時間・授業内容など、対面授業とは異なるプログラムでの実施となった。

（例年の漢文コース内容については[大竹 \(2019\)](#)を参照）

2 漢文コースの目的と特徴

このコースは、対象として、主に資料として漢文を読むことが必要な歴史学、文学、人類学、宗教研究、美術史等の分野の大学院生、研究者を想定している。漢文読解の必要はあっても、漢文基礎の学習機会が少ないことから、基礎となる構文、旧漢字、漢文訓読体、候文などを集中的に学習し、その構造知識をもとに実際の文章を読み、和製漢文の文体・特徴に慣れ、以後の研究に資することを目的としている。

受講者には次の要件を満たすよう求めている。

1. 漢文読解能力を必要とする専門的または学術的分野への従事を目指していること
2. 上級レベルの日本語能力、および文語文法の知識を有すること
3. 日本語の基礎的文法・文型を十分に理解し、ひらがな、カタカナに加え、漢字約 1000 字以上の読み書きを既に習得していること

3 受講生の構成

今年度は博士課程三名、修士課程修了博士課程進学予定一名、修士課程一名の五名の大学院生が受講した。専門分野は、中国中世文学、日本中世史、中世軍記物、日本近代史、日本近代文学で、研究において、漢文あるいは漢文調で書かれた資料の読解・理解を必要

としている。研究対象、及び、読むべき資料はある程度固まっていたが、漢文については、ほぼ知識はなかった。

4 教育活動の詳細

4-1 今年度の期間・授業時間

昨年度のオンラインプログラムの反省点などから、今年度は授業内容を確実にこなす時間を確保するため、授業を一日三コマの構成、期間を六週間弱とし、構文の授業を月・水・金、読解の授業を火・木に実施することとした。

4-2 授業の枠組みの工夫

4-2-1

一日の授業を三つの部分にわけ、第一限を午前9時から9時25分までとし、「クイズ・情報検索・前の授業で与えられた課題の確認」をすることとした。「課題の確認等」は例年の授業構成では二・三限にあたる授業時間内に行っていたが、オンライン授業では時間が不足することが予測されたので、このような時間を設けたものである。

第二限・三限を午前9時30分から午前11時20分までとしその日の内容を扱う授業時間とした。

4-2-2

年間コースでのオンライン漢文授業の経験から、「漢字辞典・国語辞典に関する指導」の必要性が分かっていたので、二回の辞書オリエンテーションを設けた。また、それ以降も授業内で、「今必要な情報を得るためどの辞書を引くか」について意識させ、どのように調べれば求めている情報にたどり着けるか判断できるよう指導した。受講生がアクセスできる辞書は形式・用語など様々で、それぞれの辞書から得られる情報を整理し用語に慣れるためである。具体的には、

- ① 漢字の基本情報にはどのようなものが提示されているか
- ② 字義はどのような階層性をもって並べられているか
- ③ 助字・句法・語法・日本語固有の使用法について、どこにどのような項目として提示されているか
- ④ 漢字辞典と国語辞典の提示情報の違いを理解し、求める情報はどちらにあるか

以上の点を中心に、全員で同じ漢字・語彙を調べながら自分の辞書はどのような形になっているのかを確認させた。

4-2-3

Google ドライブによる教材シェアを行ったが、構文の授業では、構造を説明する例文は返り点・送り仮名付きで提示し、構文がそれほど複雑でない場合、練習文・課題練習文は白文、その後複雑な構文では、基本的になるべく送り仮名を付けず、返り点のみ付したものと白文を織り交ぜて提示した。

読解の授業では課題以外の文章、参考資料を加えるなどした。また、例年よりもモデル書き下し文・現代語訳を多く提示した。

4-2-4

受講生に読解・解釈のプロセスを示すため、共有画面に書き込めるアプリケーション・機器を用い、目に見える形で道筋を示した。具体的には、Kami for Google Chrome・iPadを用い、どちらも PDF 文書を共有しながら講師側が必要に応じて手書きで書き込んでいった。

4-2-5

受講生の構文・読解のプロセスを共有するためドキュメントの形で受講生の個人ノートを設定して講師と共有し、授業中の個々の読み、また、課題とした練習文読み下し・現代語訳を書き込むこととした。授業中には講師がそれぞれの誤りをその場で指摘し、課題の場合は次の授業までに誤りが指摘された。受講生はそれぞれ指摘を見て訂正した。具体的には、受講生一人一人が自分のドキュメントファイルに読み下しなどを書き込む、講師は受講生の書き込んでいく内容を見て訂正すべき部分を赤字などで指摘する、受講生は指摘された誤りを自分で訂正してみるという流れである。

4-2-6

コースの最後には例年と同じく、一次史料読解の経験として、受講生の選んだ研究資料から一部分を選び全員で読解を試みた。取り上げたのは、『源平盛衰記』より「平家繁昌・唐皮抜丸」、小野景湛他『綿考輯録』抜粋、桃井源寅『白牛酪考』より岩本正倫「序文」、菊池三溪『奇文観止 本朝虞初新誌』より「離魂病」、夏目漱石『木屑録』序文である。

5 受講生のオンラインコースに対する評価

コース終了時に受講生に対し Google form によるアンケートを行い、回答を得た。コース全体への評価は excellent 100%と高評価であったが、課題の量が多い・ズームによる負担感が大きいことなどについて意見が寄せられた。また、授業以外のコミュニケーションの場が欲しかったとの意見があり、オンラインでの相互コミュニケーションの在り方が今

後の課題と考えられる。

6 講師の感じたオンラインコースの問題点

講師の感じた問題点として、受講生を個別に捉えるのが難しく、それぞれの弱点に対する働きかけがしにくいこと、ドキュメントの共有によって、誤りは指摘できるが、誤りに至るプロセス、例えば、課題文をどう分節化しているのか、辞書をどう利用しているのか、が可視化されず、そこに対する指導が難しいこと、受講者同士が交流しにくく、自分の持っている知識・リソースを共有できず、広がりや得にくいことが挙げられる。また、時間的余裕のないことで内容が非常に密になってしまい受講者の負担感が増す、対面授業では可能であった、「受講生の知識・理解に応じて、個別の課題を与え、個別に指導する」ことがZoom環境では時間的・手段的に十分な余裕が持たず、その点も受講者の負担になったのではないかと推測される。

7 おわりに

今年度は昨年度の経験を元にある程度の改善が図れたのではないかと感じている。受講生は意欲が高く、あまり十分とはいえない指導環境でも熱心に課題に取り組んでくれた。一方で、プログラムが進むに従ってどうしても受講者個々に差が生じ、そこに対応する時間的・手段的余裕がない事も事実である。

アンケートの評価は高かったものの、講師側には十分な対応ができていたのかどうかという疑問が残る。特に受講生間の漢文構造・語彙表現・背景知識の差に応じた対応が十分であったとはいいがたい。また、受講生にとっても、基本的要素はほぼ提示されたが、それらの基本知識を適切に用い、自分の読解に応用して行くことなどが課題として残されたと言えよう。

(おおたけ ひろこ／2022年度漢文夏期集中コース主任)

参考文献

大竹弘子 (2019) 「2019年度漢文夏期集中コース報告」 『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』 第8号 pp.186-189

<https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2019_Otake.pdf>